日刊 動労千葉

87. 7. 23

No. 2609

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

労働者の誇りにかけ出向攻撃粉砕

動労千葉第17回臨時委員会報告 3

われわれは、第十七回臨時委員会の闘う方針の決定をうけて、全支部、全職場において総反撃への体制を確立しなければならない。スト権を一〇〇％で確立しよう。

出向攻撃を闘わないことは鉄道労連の道になる

今日、自民党の極めて反動的な攻撃が続く中で、総評が三年後に解散して右寄りに再編され、国鉄でも鉄道労連＝産業報国会が主流となっている。あるいは、分割・民営化反対といっていた国労も理不尽な攻撃が加えられたにもかかわらず起ち上ろうとしなかった。

さらに動労千葉も、三〇名を越える解雇者、十二名の清算事業団、七二名にもおよぶ営業への配転が出されている現実の中で、あえて強制出向には断固としてストライキも辞さず闘いぬく方針を臨時委員会で決定した。

強制出向に対して何も闘えない、労働者の行先もわからないでは、鉄道労連の道になってしまうのだ。つまり、動労千葉として存在する基盤がなくなってしまうということなのだ。

反転攻勢に出る時がきた

われわれが強制出向攻撃に対して起ち上るということは、この数カ月間の敵の攻撃に対して反転攻勢に出るということだ。

この間いくつかの闘いを展開してきた。解雇者を中心とした事業部の闘い、清算事業団の闘い、営業に出された七二名の闘い、あるいは、東日本、貨物での闘い。これらが中軸となり全体が前進していく。つまり、本体の闘いが活性化し、そして、組合員全員が闘いに参加して全体が動きだすのである。

こういう状況の中で出向攻撃とは、職場で一切の組合活動を認めないという攻撃の重要な一環をなしている。われわれは、これに対してどうしたらいいのかが突きつけられているのだ。

国労は、東京地本の本社前座りこみに二千人、新橋支部の独自集会に四〇〇人が集まっている。われわれも、出向がきたらワイワイ騒ぎたて、出向先が「もうけっこう」というふん囲気を創りあげなければならない。

「新会社」の中で一皮剥けば何が起こっているのかを、われわれの流儀でしっかく、執念深く暴き出してやろうではないか。これからの当局に対する運動とはこういうものではないだろうか。

資本主義社会である以上、敵は差別・選別する。「やめてくれ」と言ってもやめるはずがない。である以上、敵にやらせない体制を創りあげなければならないのだ。

闘いは「拒否」から始まる

さらに、出向攻撃に対して起ち上るということは、動労千葉総体として反撃すること、営業を含めて一気呵成に飛躍させる闘いの頂点として出向攻撃に対するストライキの行使があるのだ。

いずれにせよ、出向攻撃は一人ひとりの組合員が「拒否」するところからはじまらざるを得ない。具体的には、まず事前通知がくる。そのときにあいまいな態度をとらない。嫌なら嫌とはっきり言う。その過程で労働委員会に提訴したりあらゆることをやる。それでもなお出向を強行する場合は「ストライキをやる」と当局に通告する。動労千葉は、基本協約を結んでいないから制約を受けないのだ。

問題は、そこにいくまでだ。職場の運動がどのぐらい燃えあがっているかに尽きるのだ。各支部は、全組合員と意志統一をはかり、八月のスト権一票投票を圧倒的に成功させる。この体制を創りあげることが重要なのであり、ここで勝負は決まるのである。

さらに財政の問題も同じである。全体の運動が高まる中でしか支援も協力も集まらないのだ。動労千葉が起ちあがり、不断に闘いぬくことで全国の労働者を激励し勇気を与える。そこではじめて支援や協力が寄せられるのであり、闘いがあって初めて財政基盤も確立するのだ。それが労働運動なのだ。

出向攻撃への反撃で鉄道労連解体へ

さらに、労働組合の存在も認めない、悪質な不当労働行為、団交もやらない。ここまできたらわれわれは、労働者としての誇りを見せつけてやる必要がある。

こういう過程をとおして、基本路線である鉄道労連解体の闘いをやっていく必要があるのだ。

いまこそ、一斉に組織的方針をもってやるべき状況がきたのだ。このこともやはり、全体が強制出向攻撃に対してストライキに起ちあがるという過程と連係してやっていかなければならない。

スト権を一〇〇％で確立し、強制出向攻撃を全力で阻止しよう!!

全員火の玉となり出向攻撃粉砕へ！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！